

#### ●社団法人 日本山岳会 福岡支部

### 目 次

	. <mark>福岡支部状況報告</mark> ・支部長4年間を振り返って ······
2	元福岡支部長『松木徰夫氏』のご祈去を悼む

- ・ロマンと酒の師匠 松本徰夫さん ……………………3
- 3.世界自然遺産『屋久島』をめぐって ・自然保護全国集会とその後の屋久島 …… 4 ・屋久島その後 …………………… ・世界自然遺産・屋久島の将来 ………6

・特別寄稿 松本徰夫先生を偲ぶ「まさに兄貴だった」・・・・ 2

・「コモンズの悲劇」から世界自然遺産「屋久島」を考える・・・・7

1	海局	L I	mut.	ング報4

・マカルー・ベースキャンプ(BC)への旅 ·····	10
・ミャンマー・ヒマラヤ視察とミャンマー周遊の旅 ・・・・・・・	12

#### 5.会員の活動

•	平成 23 年度総会記念講演 90 歳・私の歩んできた道	
	~戦地ニューギニアから北アルプスの山々へ~	1
•	23 年秋の発心山(耳納山地)と冬の皿倉山(北九州)の山行の記録・・・	1
•	書籍紹介『ヒマラヤの氷峰 - ヒマラヤ 50 年の追想 - 』太田五雄著・・・	1

### 1. 福岡支部状況報告

### 支部長4年間を振り返って

→ 支部長 副島 勝人

本年3月をもって支部長の任期が終わります。何かほっ とする気持ちと共に2期4年間にわたり、何かとご協力を 賜りました会員の皆様及び役員の方々にこの紙面をお借り して厚くお礼申し上げます。

さて、この4年間を振り返ると定例的な事業、会議等は 実施してきましたが、支部長就任時策定した4項目(支部 報22号)についてはほとんど成果を上げていない状況で す。第1番目の項目は、大きな計画であるカンリガルポ山 域への登山隊の派遣です。しかし未だ実現できていません。 平成21年10月ゲムソング峰登山計画を発表し隊員募集に 入りましたが1名の応募で計画が停滞しています。故松本 徰夫先生を中心に会員の方々の5年間にわたる調査・研究 を生かすためにも何とか登山隊の派遣を、と考えますが、 この経済不況の中、長期にわたる登山活動と高額な隊費の 負担は計画の推進を阻んでおります。これから先、支部と してこの計画を推進するか凍結するか判断する時期に入っ ているのではないかと考えております。

次に掲げたのは、「共益、公益事業の推進」です。本部で は10月24日公益社団法人への移行認定申請書を内閣府に 提出し、2月下旬認可、4月1日新法人発足の日程で作業が 進められております。4月以降公益社団法人として公益事 業の取り組みが今まで以上に求められてくるでしょう。福 岡支部においても、サロン的雰囲気の支部運営から行動す る支部へ切り替えることが必要です。支部としては、平成 20年度から会員及び会員外の方も対象にした事業に取り 組んできましたが、さらに一般市民を主体にした事業の取 り組みを考えなければならないかと思います。今まで講演 会2回、映画会を今年の1月を入れて2回実施しています が、屋内の行事より、山に登る集団として、市民の方々を 対象にした「登山大会」や「登山教室」等を企画実施して いく方がより良いのではないかと思います。

しかしそのためには、3番目の項目である「会員相互の 連携、親睦の強化」が大切な要素となります。事業を展開 していくためには会員皆様方の協力がなければ何もできま せん。今まで自然観察会や"時々山行"に取り組んできま した。昨年10月には筑後地区の方々が中心となって発心 山登山の実施。そして12月には北九州地区の方々のお世 話で皿倉山忘年登山が行われました。自然観察会は年1回 実施しておりますが会員山行について毎月とはいかなくて も定例的に取り組むべきでしょう。定例的な山行から会員 間の連携と親睦が図られ会員同士の情報を豊かにし、そし て会員皆様の知識や技術、経験を提供して頂きながら、前 述の市民登山大会や登山教室につながって行けばと考えて おります。

4番目の項目は「支部会員の加入促進」ですが会員数と 関係がある支部予算のことも併せて述べたいと思います。 前述した「登山大会」等々を実施するには会員の協力がな ければなりません。数は力です。21年106名の支部会員 数が現在92名となっています。そして今、新たな問題が 生じてきました。日本山岳会の公益法人化にともなって、 24年度から支部助成金2500円が「事業補助金1500円」

と「支部運営交付金 1000 円」に分割され、事業予算及び 支部運営予算の申請が必要となりました。そして会計年度 終了時にはそれぞれ精算報告を行い予算残金は返還しなけ ればなりません。

現在支部の運営経費は本部からの助成金のみで支部会員数が支部予算の算出基準となっています。交付された助成金は、支部報発行費や諸連絡等の事務的経費に支出され予算残は繰越金として翌年度の予算に計上されてきました。24年度からは「支部運営交付金」として1人1000円の現在会員数でいくと約92,000円となります。しかし、この予算額では支部報の発行や運営経費を節約しても赤字となり支部運営が困難となります。次年度の事業計画及び予算案の詳細は24年度総会で提案されますが、支部運営経費の不足を解消するための方策を検討する時期ではないでしょうか。予算増のためにはまず支部会員の加入増を図る必要があります。しかし支部会員数が増加しても支部運営費の予算不足の解消とはなりません。「支部会員加入促進」プラス「収入増」を図るための方法を検討する必要があります。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

世界自然遺産屋久島の問題については、平成22年本部自然保護委員会に「世界自然遺産プロジェクトチーム」が立ち上げられ現地調査と関係者との意見交換会が行われ、「屋久島への提言」一危機遺産にさせないために一が発表

されました。福岡支部としても本部自然保護委員会と協力 し問題解決に取り組んで来ました。その集大成として、自 然保護委員会と共催し福岡で自然保護全国集会を「エコ ツーリズムと屋久島」のテーマで開催することが出来まし た。開催に際して会員の皆様からご理解とご協力を賜り改 めてお礼申し上げます。自然保護集会では、広瀬敏通氏(日 本エコツーリズムセンター代表理事)から基調講演「エコ ツーリズムとは」、パネルディスカッションでは「これか らの屋久島を考える」をテーマに屋久島が抱える問題解決 のための意見交換が行われました。福岡支部としてはこの 集会をもって屋久島問題の取り組みについて一応の区切り がついたものと思います。これからは島民の方々が世界自 然遺産保護のため、発表された「屋久島への提言」をどの ように考え生かしていくか、注視していかなければならな いと思います。

1987年(昭和62年)3月福岡支部再建以来支部役員として微力ながら携わってきました。そしてこの4年間は支部長として特色ある支部活動を、と念じながら無事ここまで務めて来ることが出来ました。これもひとえに歴代支部長様はじめ多くの方々のお力添えの賜と厚くお礼申し上げます。これからの福岡支部の発展と会員皆様のますますのご繁栄をお祈りして終わりたいと思います。

## 2. 元福岡支部長『松本徰夫氏』のご逝去を悼む

### 特別寄稿松本徰夫先生を偲ぶ「まさに兄貴だった」

—──<sup></sup> 前日本山岳会東九州支部長 梅木 秀徳

松本さんと最初に出会ったのは昭和27年4月だった。 日田高校に入って山を始めた私は高校山岳部研修会などを 通じて加藤数功氏の知遇を得て、氏の勧めもあって九大に 進学した。そして「大学の近くにピカドンという本屋があ るから訪ねなさい」と言われた。ピカドンこと閃発書房は 六本松の教養部の前だった。そこで吉田太三郎氏にお会い し、立石敏雄先生を紹介され「九州山小屋の会」に入会し た。その例会で松本さんに紹介された。お父さんのお名前 は高校時代から知っていたので、驚いたものである。

以後、登山をともにした。山小屋の会は筑紫山岳会のクラブ・ヒュッテ・あせび小屋を維持するという目的もあり、その夏、小屋番をした。一つ上の草野一人さんと三人でほぼーカ月を小屋で過ごし、小屋番を交代しながら九重を歩き回った。そして、雨の日の退屈しのぎにつくったのが「坊がつる賛歌」である。替え歌という意識から「替」にちょんちょんを加えて「賛」にしたが、芹洋子さんが歌う時、讃歌になった。

松本さんは地質という「お堅い」学問を専攻しながらも、 あるいはその反動もあってか、繊細な面を持ち合わせてい たし、センチメンタルなことを好みもした。作詞の過程で それが分かった。メランコリーなどの言葉の選択は松本さ んだったと思う。

同じ時、「山行きヤットン節」もつくった。「酒飲むな、酒飲むなのご意見なれど…」の、これも替え歌である。そのなかに、岩からずっこけ落ちたる抱きつきマニアとか、藪山ほっつき歩くケバ山歩き、ゲレンデに大穴開けたる材

木担ぎなどの文句がある。岩登り、藪こぎ、スキーのことで、ともあれ松本さんとは山でありさえすれば何処へでも行った。 当時の私の「山日記」によると、年間に山とアルバイトと学生運動がそれぞれ100日、残りの65日が教室だった。 松本さんとは山だけではあるが、今にして思えば、良くぞ付き合っていただいたものである。

二年後に箱崎に移ってからは、地質研究室でもしばしば お会いした。迷惑なことだったろうが、そんなことはお構いなしに山の話ばかりしていた。助かったのは、研究室に 英文タイプライターがあって、勝手に使わせてもらったことだ。仏文研究室にはもちろん仏文タイプはあったが、それが引っ張りだこでなかなか使えなかったから、結局、私の卒論は地質研究室で書き上げたものである。

山岳会での話し合いでは、時おり意見が衝突することも あった。立石会長は植物、松本さんは地質と、時には会の 山行の目的が学究的になることもあり、山一途の者との間 に意識のずれが生じ、激論となることもあったが、結局は 「ともあれ山に行こう」で収まった。

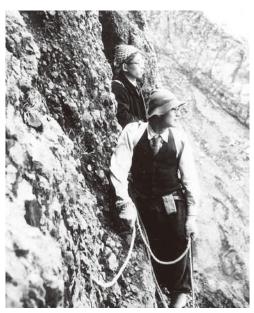
そのようななかで、今でも鮮やかに思い出されるのがカドマリ谷での大晦日のビバークである。確か四人だったと思うが、正月の休みを利用して人吉から市房山に登り、霧立、向霧立、さらに傾山まで歩き登り通した時のこと。大国見から雷坂を下ろうと計画していたが、地図にはあるが道はない。結局、カドマリ谷の源流部で焚火をたいて大晦日を過ごした。その時、松本さんがザックから大切に取り出したのが折詰だった。「柴ちゃんが作った」というお節

料理だったのだ。お陰で持参の水筒の酒はあっという間になくなった。その際、「これを機会にタバコを止めよう」と、酔った勢いもあってタバコを箱ごと焚火に投じた。しかし、長くは続かなかった。傾から九折に下って猟師さんの家にお邪魔したら、土間でタバコの葉を乾燥させていたからだ。その途端、松本さんも私も決意は砕けた。

卒業して私は大分市での生活となり、加藤氏らと山岳会を立ち上げ、松本さんは山口大学で教鞭を執ることになる。 文通は続いたものの、山行を共にする機会は極めて少なくなった。ただ、私が日本山岳会の東九州支部長をしていた時、松本さんが福岡支部長となり、年に数回は顔を合わせる機会が生まれた。と言うことは、酒を飲む機会が増えたということでもある。東京での会合を利用して、八ヶ岳に山小屋を造っていた草野さんを訪れ、ホウトウを肴にほぼ 徹夜で痛飲したこともあった。

そしてお互いにチベットへの関心を深めたこともあって、情報をやりとりし、中国登山協会の地図などを融通し合い、著書などを交換することになった。さらに近年、私が「九重山博物誌」を出し、さらに「九重の自然と歴史」で松本さんが火山・地質誌を、私がまえがきを書いたのを機に、「九重山 法華院物語」を編著して、たびたびお会いすることが出来るようになった。

お互いの呼称は私からは「松本先生」となり、松本さんからは「梅木さん」になったが、アルコールが回ってくると何時しか昔の「ひでのりくん」が復活していた。私としては「松本の兄貴」と呼びたかったが、それは遠慮した。しかし、何時かはそう呼びかけたかった。それも今は叶わない。





### ロマンと酒の師匠 松本徰夫さん

#### No.8136 • **深田 泰三**



カンリガルポ山群にて 2004 年 11 月

昨2011年3月30日、支部の大黒柱である松本徰夫さんが彼岸の国に旅立たれた。急なことで信じられなかった。

松本さんとはお付き合いして、もう50年近くなる。最初が、いつどこでだったかは、はっきり思い出せないが、福岡県山岳連盟の行事のような気がする。その後、松本さんが日本山岳会福岡支部で支部長をされた時は、副支部長と

してお手伝いさせて頂いた。さらに、日本山岳会編「新日本山岳誌」の原稿校正の時には、何日も自宅にお邪魔し、作業後は遅くまで酒を飲みながら色々な話をし、時間が経つのが早かったことを思い出す。また、私が20代後半の頃、毎年福岳連主催で傘下の各山岳会が当番となり、酒、おで

ん等を用意して、親睦を目的とした飲み会が開催されていた。当時から、酒には自信があった私であるが、生にんにくを肴にコッヘルで、酒を飲んでいる者がいて、「こいつやるな!」と思った人が松本さんであった。

松本さんの素晴らしさは、いちいち述べなくても、皆承 知のことであるが、私が特筆すべきところは、話している と"泉"のように"ロマン"が湧き出て、終わりを知らな いところであり、お互い酒好きのため、酒が無いと話にな らず、2人の間には常に酒があったことである。そのよう な思い出のいくつかを挙げると、福岳連の関係で、付き合 いも深くなった 1969 年の福岳連ヒマラヤ遠征隊(創立 20 周年記念登山 / ティリチ・ミール [7706m]) に、2 人が参 加した折、酒の無いはずのパキスタンでも、何故か酒が飲 めたこと。また、1998年の支部創立40周年記念登山時(ナ ムナニ [7694m] 登頂) に登頂成功を祝い、2人で酒を飲み 始めると、話のスピードが加速度的に上がり、さらに話の 範囲が何処までも広がって、あっ!という間に夜が明けて いて、とても驚いたこと。等があり、詰まるところ、松本 さんと私との付き合いは、"酒に始まり酒に終わった"と 言えるであろう。

ここ数年松本さんは、自分を育ててくれた九重山にお礼をしなければと、「九重山法華院物語一山と人」(松本徰夫・梅木秀徳[編]「九重山の花暦」(松本徰夫・山本博[編])を出版された。また、一昨年から11月第2木曜日を「法華院の会」と称し、法華院の関係者や昔からの山関係の人達が法華院に集い、楽しい一夜を過ごす会も作られた。残念ながら昨年からは、もう松本さんは不参加となってしまったが、これからは松本さんが残されたこの会を、守り続けることが私の仕事と思っている。

最後に、松本さ~んもう一緒に飲めんとが悔しか~また飲みたか帰って来んしゃ~い。何時まででも待っとうば~い。



西中洲にて

## 3. 世界自然遺産『屋久島』をめぐって

### 自然保護全国集会とその後の屋久島

No.12312 ——○ 福岡支部自然保護委員 山本 博

2011年度日本山岳会自然保護全国集会が6月11日(土)、 屋久島問題をメインテーマとして福岡支部の担当で福岡市 天神の"西鉄イン福岡"で開かれました。

前夜までの豪雨は、当日の朝方から小止みになったので一安心でした。参加者は首都圏および全国各地 20 支部から約 90 名。午前中は各支部の活動報告、午後に入って尾上昇 JAC 会長の挨拶から始まり、日本エコツーリズムセンター代表理事広瀬敏通氏による記念講演「エコツーリズムとは何か」が行われました。氏の広範囲にわたる活動に驚嘆、また一口にエコツーリズムといってもいろんな問題が入り組んで画一的には論じることは出来ないことがよく分かりました。

そのあと先に日本山岳会自然保護委員会が公表した「屋 久島への提言─危機遺産にさせないために─」をまとめた 山川陽一委員の説明があり、その後山本の司会で、パネル ディスカッション「エコツーリズムと屋久島」に入りまし た。パネリストは山川陽一、広瀬敏通、太田五雄 (JAC 福 岡支部会員、屋久島在住)、伊藤秀三(長崎大学名誉教授、 日本ガラパゴスの会会長)、井上晋(JAC 福岡支部自然保 護委員、前九州大学准教授)の各氏。太田さんは屋久島の 現状を、井上さんは亜熱帯から冷温帯まで多種にわたる植 物の垂直分布が見られること、153科、1273種という多く の植物があるところは世界的にも稀であること、固有種が 62種と多い貴重な島であることなど、また屋久島のシカ の食害にも触れて話し、伊藤さんは世界自然遺産第1号で あるガラパゴス諸島が一時危機遺産リストに入ったが、登 録後に発生した諸問題を克服、改善して危機遺産リストか ら脱却したこと、またエコツーリズムとして整備された認 定ガイド制度などを話しました。

そのほか林野庁九州森林管理局から国有林野管理課の濱田秀一郎課長と屋久島森林管理署の木暮甲吉署長が出席され、屋久島でもシカの増加に手を焼いて、今は駆除に努めている。昨年は1,700頭を駆除したとの話がありました。また、登山者とくに縄文杉への一般コースである大株歩道の負担軽減が必要と考えている。そのためには、現在は同

じルートを往復しているが、迂回ルートの必要性を認識しているとの発言がありました。

環境省も出席の予定でしたが、高速道が豪雨で通行止め となり出席不能となりました。

屋久島町の日高十七郎町長が午前中に会場に見えましたが重要な会議があるからと1時間ほどで退出されました。その前に発言をお願いしましたが、当たり障りのない内容でしたが、現状のままでいいとは決して思っていないとの印象を受けました。その後の質疑応答も内容の濃いものになりました。

12日(日)フィールドスタディーの目でした。宝満山登山組と四王寺・太宰府政庁コースの2組を予定していましたが、朝から降り続く豪雨でアウトドアの活動は中止となり、みんな一緒に新緑の宝満山表登山口の竃神社に参拝、雨に洗われた緑に固まれた神社は印象的でした。そのあとバスで四王寺山の福岡県民の森に上がってから天智天皇のときに大陸からの侵攻に備えて築かれた水城を見学、太宰府天満宮にまわって参拝、九州国立博物館や見ごろだった菖蒲池などを散策しました。雨で山には登れませんでしたが、それなりに参加者には楽しんでいただけたのではないかと思っています。このアウトドア企画では小西信二さん、酒匂輝昌さんに計画の段階からいろいろお世話をお願いしました。感謝します。また併せてその他支部会員のご盡力に感謝します。

\* \* \* \* \* \*

その後屋久島では大きな動きがありました。6月の町議会は町が提出した"環境保全目的で縄文杉見学者人数制限する条例案"を全会一致で否決したのです。縄文杉への一般的なルート"大株歩道"を通る人数は年間約9万人に及んでいます。10年間で約3倍に膨らみました。登山道の整備は行われてきましたが、整備された木道の幅は70cm、すれ違いも出来ない狭いものです。踏みつけによって絡み合った根が露出しています。この状態が続けば、自然破壊は進むばかりでしょう。そのことは島の皆さんも口にされますが、実際の動きはにぶいように思われます。

昨年10月には屋久島町長選が行われました。条例案の 再提出に意欲を示す現職を含む4人が立候補、現職以外の 3人はいずれも入山規制には原則反対の立場でした。選挙の結果は新人の荒木耕治氏(61・民宿経営)が当選、「環境保護は登山道の分散化や山岳部以外の観光化で可能」との立場。当選後、入島料導入に言及したと伝えられましたが、島では3分の1の人たちが観光に関っているといわれています。観光協会、観光業者の発言力は大きいのが実状でしょう。

鹿児島県は県議会で入山規制について「一定の規制は避けられない」との見解を示しています。県としては現状のままでいいとは考えていないのです。

今年、UNESCOの世界遺産委員会は9年ぶりに屋久島の現状を踏まえて再評価を行います。それに対して地元がどう対応し、それを委員会がどう判断するでしょうか。

2011年12月毎日新聞(西部版)は"「危機」にある遺産・屋久島からの報告"を5回にわたって掲載、1回目は1面トップの扱いでした。そこでは、年9万人が訪れる縄文杉は悲鳴!保護と観光振興の接点は?と問題を提起、突然の世界遺産登録で対応がすべて後手に回ったこと立ち入り制限の議論が進まないことさらに登山者のし尿問題、ガイドの問題など広く問題を取り上げかなり深く掘り下げてくれました。全国紙がこれだけ大きく取り上げてくれたことは大きいと思います。

東日本大震災の影響や景気悪化などで屋久島への来島者は減少傾向にあるとの不安が観光業界内にあるもいわれます。しかし、昨年ある民放が行った「行ってみたい世界遺産」のランキングは 1. マチュピチュ、2. モンサンミッシェル、3. ピラミッド、4. 屋久島、5. ベルサイユ宮殿、6. グランドキャニオン、7. ガウディの建築群、8. アンコールワット…となっています。自然遺産では屋久島がトップです。また、関東一円のいわゆる山ガールの三大聖地とされるのが、富士山、屋久島、高尾山ときいては天を仰ぎたくなります。観光関係者からは現在30~40万の入島者だが、60万人までは対応できるとの声もあるとのことです。まだまだ屋久島ブームがおさまるとは考えにくいようです。

昨年12月環境省は屋久島を「霧島屋久国立公園」から分離独立させて「屋久島国立公園」にすることに決めたと報道されました。今年1月荒木耕治町長は来島者から入島料を徴収する方針で検討会を発足させると発言しましたが、方式や金額などいろいろ問題もあるようです。また、昨年夏に入山規制案に全会一致で否決した町議会がどう反応するか、UNESCOの再評価を前に島のあり方をどう考えるかが問われます。これから屋久島はどのような道をたどるのでしょうか。

### 屋久島その後

No.6486 **太田 五雄** 

世界遺産である屋久島の諸問題について日本山岳会、日本山岳会・福岡支部、自然保護委員及び有識者からなる世界遺産プロジェクト等の改善提言活動は、「福岡支部報」、

自然保護委員会の「木の芽草の芽」、ホームページ「屋久島への提言」等で紹介されてきたので内容についてはあえて紹介はしないが、その後の屋久島の動向について報告する。

### 1. 縄文杉への人数制限条例案否決

屋久島は世界自然遺産登録後18年を経過した。しかし、世界遺産の主旨である「世界の文化遺産、自然遺産の自然保護に関する条約」に反し、問題山積の最中にありながら何等改善がなされることなく観光化に傾斜し、危惧する関係者の努力もむなしく現在に到っている。

近年世界自然遺産後の縄文杉への登山者数は増加の一途 を辿り、2009年には9万人、復路を考えると18万人が利 用した。

世界自然遺産後のこの異常な登山者の増加に伴い、将来を危惧した屋久島の環境省、林野庁、行政、有識者は1年間の登山者のピーク緩和の平準化として420人/日とした。併せて日本山岳会プロジェクトではトイレの許容量を考慮して300人と算定し、外島内各登山コースの入山者制限(小屋の許容に基づいて)及び登山道の改善策、自然環境維持の為の財源確保として入島料徴収の提言、ガイドの資質向上に伴う新たなガイド構築案等総合的に提言を行ってきた。

これ等のいきさつを踏まえ、昨年6月23日、日高十七郎前町長は「自然観光資源の利用及び保全に関する条例」案を提出し、環境省が提唱している3月1日~11月30日間の縄文杉への登山者数を420人/日に制限、縄文杉への入林立ち入りを事前承認制とし400円/一人の徴収など議会の議決を図った。

しかし、この条例案には根拠の説得性がなく、町の経済 は観光への依存度が高く、一気に制限すれば観光産業への ダメージが大きいという理由から議会の全員反対をもって 否決された。

思うに、縄文杉の大株歩道は過剰なオーバーユースによる登山道の踏圧エロージョンの問題もさることながら、トイレの問題が大きなウエイトを占める。最近携帯トイレを推奨し、ブーストの増設等図ってきたが、過剰な登山者の増加により排泄物の全容量を処理できる体制になく、人力による汚物、ゴミの搬出、オーバーユースによるバイオトイレの故障、山中排泄による安房川の水源汚染問題等大きな問題を抱えている。

歩道(登山道)周辺の環境悪化、それに伴う木道の広がりによる景観林の阻害、ガイドの資質等多くの諸問題は全く進展なく未解決のままにある。

### 2. 屋久島の官公省庁トップの交代

環境省自然環境局自然保護官、林野庁屋久島森林管理署署長、林野庁屋久島森林環境保全センター調整官の人事移動が昨年7月にあった。

屋久島に出先をもつ官公省庁のトップは2~3年で交代する。世界遺産プロジェクトでもそうであるが、せっかくこれまで築いてきた計画や会議の内容は官公省庁の交代によって振り出しに戻る。この様な実態は世界遺産後ずっと繰り返され、この18年間このような状態が続き改善され

てこなかった。

中長期の基本計画がしっかりしていないことと、トップの交代による再検討等によりいっこうに進展しない。一旦 きめられたことは期間内に実行されなければならないが、予算の都合や再三の計画の見直し変更などでなかなか具現化していない現状にある。

### 3. 屋久島町町長の交代

屋外町時代から長きにわたり町長を務められてきた日高十七郎氏は「自然観光資源の利用及び保全に関する条例」案の継続審議を訴えてきたが、10月の町長選で敗北し、新たに荒木耕治新町長が誕生した。

屋外島の町長や議員選挙は屋外島の将来を左右するものであり、屋外島の経済を担う一部の島民は経済優先を支持し、自然保護などを考えるマイナーな島民はどうしても弱い立場にあることは否めない。

新町長として前提出された条例案や世界自然遺産についての考え方を要約すれば

- ①縄文杉への人数制限は最後の手段として慎重に判断したい。
- ②1日420人の制限根拠には疑問があり、学術調査による 裏付けが必要。
- ③他の既存ルートを整備して一方通行とする案
- ④入島料を徴収して登山環境の整備に充当する。
- ⑤島全体の観光行政の再見直し。

等である。所謂、民意を反映した慎重な考え方と言わざる を得ない。今後の手腕、活躍が大いに期待されることである。

昨年の屋久島の観光は東日本大震災、世界不況による円高の影響があって幾分減少にあった。2007年の入島者数(40万人超)をピークに、右肩上がりの時代は終わり、安定した観光に傾斜するのではないかと思われる。

屋久島の世界自然遺産の主旨に沿う改善はまだほど遠く、むしろ期待できない現状にあることは否定できない。

最近屋久島町は40キロ北東海上に浮かぶ馬毛島に、防衛省は米軍艦載機の陸上空母離着陸訓練(FCLP)を移転する計画が浮かびあがり、種子島を含め新たな難問の噴出に反対運動を展開しているところである。

世界自然遺産の諸問題、今回新たな FCLP の問題等、周囲を取り巻く屋久島の環境は明るい未来とは言い難い。

### 【参考文献】

- 1.「屋久島への提言」 H21. 1.日本山岳会自然保護委員会 世界遺産プロジェクト http://jacsekaiisanprj.sakura.ne.jp/
- 2. 「木の芽草の芽」No. 84 ~ 94 日本山岳会自然保護委員会
- 3.「福岡支部報」No. 24 日本山岳会福岡支部
- 4.「どうなる?屋久島縄文杉ルート」 「岳人」No.772号

### 世界自然遺産・屋久島の将来

No.12540 **─○ 福岡支部自然保護委員 井上 晋** 

昨年(2011)10月31日の新聞記事を見て、率直に言って、 私は「これで屋久島の森林は終わったな」、と思いました。 それは前日に行われた屋久島町長選の結果を報じたもの で、4人の立候補者が立ち、そのうち民宿経営で縄文杉へ の登山客制限反対派の荒木耕治氏(61才)が有権者数の約 3割を得票して当選したからです。昨年の6月11・12日の 両日、日本山岳会自然保護委員会の全国集会をここ福岡支 部がお世話して福岡市で開催、この時のテーマ『エコツー リズムと屋久島』を討議しましたので、記憶に新しい方も 多々あると思います。その折短時間出席されました、入山 者数制限の必要性を訴えた町長・日高十七郎氏が第3位で 落選、このことは、6月の町議会で人数制限条例案が全員 一致で否決されていましたので、うすうす予想されたこと でもあったのです。それにしても観光一辺倒の人が当選し た事は、屋久島の森の将来性、殊にヤクスギを含めた森林 植生は当分の間、全くお先真っ暗としか言いようがありま せん。一昨年10月、日本山岳会自然保護委員会・世界自 然遺産プロジェクト(代表・山川陽一氏)が討議し、科学 的に取纏めて屋久島町長ほか関係処々に送った要望書『屋 **久島への提言』も島の人々には通じなかったように覚えま** 

昨年1月の福岡支部報 (No. 24) で、特集『世界遺産「屋 **久島」の自然保護を考える』の中で、私はヤクシカの食害** と植生を取り上げ、島固有の植物が野生シカの急増ですで に相当数が失われ、森林の生態系が崩れ始めたので、シカ の駆除に至ったが、捕獲頭数等から不充分と述べました。 主旨は、先の世界自然遺産決定の際に最重要な条件となっ た島の生態系維持と多数の固有植物群の両面が草食獣の鹿 により最早以前の状態ではないと言いたかったのです。そ の上、日本山岳会が要望した世界遺産の一つになった縄文 杉はじめ貴重なスギ林来訪者の激増によるオーバーユース 問題と重なり、島の自然保護が一刻の猶予もない危機的状 況に現在なっていると見るべきでしょう。この点、島在住 の太田氏の言う、今回の町長選で最下位の荒木博武氏が訴 えた「照葉樹林の回復」はシカ駆除も含め、ある程度の的 を得た標語だったと思います。今後の屋久島の森林生態上 及び自然保護上から、私は最悪の方が町長に選ばれたと考 え、冒頭の言葉に繋がったのです。私には島民や関係機関 の方々が、島の自然を食いものにしているとしか映りませ ん。ちょうど蛸が自分の手足を食べて自滅するような、そ のような状態です。一度破壊されたら数百年を越え自然や 森はなかなか元に戻らないことは古今東西よく聞く話、屋 久島だけはそうしたくありません。

かくなった以上、今年(2012)の環境省の査定やユネスコによる評価で危機遺産に入れてもらい、太平洋のガラパゴス諸島やインド洋のセイシェル共和国のような自然蘇り大作戦を屋久島自らが考え出し行動するより外はないようです。屋久島の再生は、この方法が一番速い気がします。

### 「コモンズの悲劇」から世界自然遺産「屋久島」を考える

No.7698 · 辻 和毅

### 1. はじめに

昨今、屋久島では入島客で混雑し、登山者の急激な増加によって登山道が荒廃したという。その話が支部の月例会で自然保護委員から報告されたとき、私はすぐに有名な「コモンズの悲劇」の話を頭に思い浮べた。コモンズは日本語で「共有地」、あるいは「共用財」などと訳され、日本の「入会地」に近い意味がある。そこで起こった悲劇とはいったい何であろうか。

「コモンズの悲劇」の話はアメリカの生物学者ハーディンの 1968 年の論文に由来する。それによれば「コモンズは集団で所有している資源である牧草地のことで、そこに複数の農民が牛を放牧する。農民は最大の利益を求めてより多くの牛を放牧しようとする。共有地では自分が牛を増やさないと他の農民が牛を増やしてしまい、自分の取り分が減ってしまうので、牛を無尽蔵に増やし続ける結果になる。こうして農民が共有地を利用する限り資源である牧草地は荒れ果て、結果として全ての農民が被害を受けることになる。最悪の場合には共倒れになってしまう」というお話である。

反対に、私有地であれば牛が牧草を食べ尽くさないように地主が数を調節するため、牧草地が荒廃してしまうことはなく代々続いてゆく。彼の論旨は「地球上の人口急増の抑制と資源管理」にあり、「コモンズの悲劇」はその前段の隠喩的なお話である。だから本来限られた場所の話ではなく地球上の生命体を将来的に運営するソフトを論じた大きな意味合いがあるという。

この小論ではこの話をモチーフに環境問題に対する一般 的な対策の考え方を参考にしながら、九州の最高峰を抱く 屋久島の自然の保護策について考えてみたい。

#### 2. 屋久島の略歴と現状

さて、話は屋久島に移る。この島は面積 500km² 余の大半が山岳よりなる島で、そのほとんど(80%以上)が国有地である。杉の伐採が始まったのは、江戸時代初めである。明治になって地域住民と土地の所有権をめぐって訴訟がおこり、最終的に国側が勝訴し国有林として決着した。森林開発の「屋久島憲法」が策定された後、大正末から林野庁によって杉の伐採が続けられた。第 2 次世界大戦後すぐに国有林事業が独立採算制になると、伐採は一気に増産に転じ、昭和 30 年代後半から 40 年代が最盛期であった(図-1)。しかし土砂災害の発生や伐採反対運動も激しくなったため保護地域の拡大や皆伐地区の縮小措置がとられたあと、昭和年代の終わりとともに伐採は実質上停止した。それは昭和 39 年(1964 年)霧島屋久国立公園に編入されたからでもある。

私事で恐縮だが、私が初めて屋久島に行ったのは昭和41年(1966年)頃で小杉谷には林業小屋があったし、木材搬出のトロッコも安房まで動いていた。小屋は1970年に閉鎖された。そして1993年(平成5年)12月に白神山

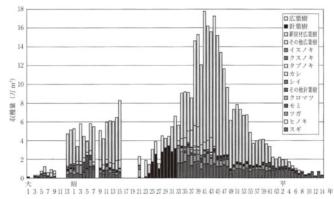


図-1 屋久島国有林収穫量推移(樹種別)(大澤他、2006)

地とともに日本初の世界自然遺産に登録された。日本が国際連合の世界遺産条約に批准した翌年のことである。国民のあいだでさえ世界自然遺産に対する理解が進んでいたとはとても言えないなかで振って沸いたような地元にはタナボタの話であった。

以来屋久島は急激に数多くの登山者や観光客でにぎわいをみせ、とくに注目の的となった感がある「縄文杉」には日に千人を超える登山客が列をなして山に向かう日もあるという。指定以来18年近く経った今、山が荒れた、島の環境が悪くなった、自然保護が台無しだという声を聞く。島に住む友人から直に見た自然の荒廃となかにガイドと称する人たちの質の悪さ、宿泊施設の不足、さらに地元自治体の世界自然遺産への理解の無さについて聞くも寂しい話はつきない。

#### 3. 自然保護との関連

以上、簡単に記した島の現状には冒頭に述べた「コモンズの悲劇」を思わせる実態が見える。誰の目にもすぐに「コモンズの悲劇」の舞台である牧草地を屋久島に置き換え、押し寄せる登山客や観光客を牧草地の専有者たちに置き換えて考えると、事の次第は同じ筋書きのように思われるであろう。しかし、屋久島で抜け落ちているのは「専有者共同体」の意識や「管理」の不作為という肝心のソフト欠落の実態である。

確かに昭和55年頃まで林野庁が山に入って管理していた時代は、杉の伐採による自然破壊はすさまじいものであった。チェーンソーの導入と林道やトロッコの建設がそれに輪をかけた。当然反対運動が起きた。

それでも国有地内の伐採地や運搬路以外の地域が、林野庁という特定の組織によって一括管理されている間は、自然破壊が島の広い範囲におよび大きな問題となることは少なかった。今も林野庁が大地主で森林の管理をしていることは変わりないが、現在島は国立公園だから、環境省も管理する立場になって、職員が安房に3名常駐しているが、巡視や管理が満足にできるはずもない。二重行政は隙間だらけである。

島の大半は国有地で国立公園に指定された場所だから、 国民にとって「コモンズ」のような土地と同じと考えてよいだろう。したがって誰も制約を受けず、興味をもつ不特定多数の人間が押しかけてくる。多くの人が自分ひとりぐらいではなんでもないだろうと気に留めることもなく、木 の根を傷つけ草を踏み倒して我先に「縄文杉」や頂上を目指し、縦走路を闊歩してゆく。

そして18年経った今、山が人気のあるルートを中心に 荒廃してしまおうとしている。今までこんな状況をなんと かしなければという声はあったが、反響は俗世間の人気や 観光にかき消された感がある。今後何年も同じことが続け ば影響は広い範囲におよぶだろう。

こうした状況の中で、日本山岳会が同じような問題を共有する「白神山地」や「知床」とその深刻さを共有し、全国に訴えようと 2010年シンポジウムを開催したことは非常に意義深い。この小論では屋久島で「コモンズの悲劇」を繰り返さないために、後日談と他地域の環境がらみの類似例を参考にしながら、屋久島の自然保護に対し問題を提起してみたい。

### 4. タイの地下水の規制政策

そのまえに、少し寄り道になるが、共有地(物)へ分け隔てなく参入を放置したことにより全体をダメにしてしまった例をあげたい。例えば昨年大洪水に見舞われたタイのバンコックでは、戦後手近で安価な水質の良い水源として数多くの井戸が無秩序に掘削され、生活用水や工業用水として利用された。しかし長年にわたって地下水を過剰に汲み上げたため広い範囲で地下水位が低下し地盤沈下を引き起こした。2メートル以下の標高しかない低平なデルタに位置する市街地は地盤沈下のみならず、内水面排除施設の不足のためたびたび洪水に被災し、塩水浸入による水質汚染に悩まされ、大きな経済的損失を被った。

これは「コモンズの悲劇」と全く同じである。これに対しタイ政府は地下水の取水制限に乗り出した。タイでは法律上地下水資源は他の鉱物資源と同じ扱いであったため、1977年に制定された国の法律「地下水法」により規制した。まず障害の程度に応じ取水規制区域を設け、井戸の新規掘削を禁止した。次いで取水量に応じて地下水料金を課金するなど法的措置を素早く実施し取水量を規制した。その結果ようやく最近では地下水位が回復し、地盤沈下も収まった。しかし、地盤沈下は元に戻らないから、その結果が今日の広範囲の洪水をもたらした原因の一つであることは間違いない

以上の歴史的な経緯から、私たちは対象物が国有財産であれば、国が法的措置によって規制地域を設けて私利を独占的に得ようとする行為を強く規制することができること、さらにその利用に対し料金を課すことができることを学ぶことができる。

### 5. ノーベル経済学賞授賞作『コモンズを管理する』から 学ぶこと

つぎに話がますます本筋から外れてしまうようにみえますが、実のところ本文の筋書きの根幹に触れる話に変わります。2009年、アメリカのエリノア・オストロムという今年78歳になる女性がノーベル経済学賞を受賞しました。この賞は女性では初めてだそうです。経済学にはまったく畑違いの私が彼女に関心を持ったのは、彼女の研究が「コモンズ」に関係するからです。授賞対象の一つに『コモン

ズを管理する』(1990) という本があります。まだ和訳本は出ていないようですが、2007年に20版を重ねた代表作だそうです。彼女は数多くの「コモンズ」や類似の事例研究から得た結論として「コモンズの悲劇」は「私有化とは違う第三の道で防ぐことができる」と言っています。直訳で分かりにくい文になりますが、その原則は、

- ①. 共有の資源を公やけに認められて使用する専有者の範囲を定義すること
- ②. 共有する資源を使う専有者共同体と資源に特定の属性との間に関係が存在すること
- ③. 争いを調整する関係者間のメカニズムの、少なくとも 一部は現地の専有者によって作成されること
- ④. 現地の専有者に対して責任ある人たちによってモニタリングされること
- ⑤. 段階的な罰則で拘束されること

の5つです。この本は導入部では興味ある事例研究とそこから導き出される原則を積み上げた作品で、事例の1つとして、カリフォルニア州の地下水盆のなかで競合する井戸群の水利権競争と妥協策に至る経緯や日本の村における入会地の事例が述べられています。

提唱された「コモンズの悲劇」に派生する問題を解決する考え方は、人工孵化以前の川を遡上するサケの漁獲争いとその上下流問題に関する研究や、つい最近では乱獲だと騒がれたクロマグロの漁獲制限の方法をめぐって、小グループによる共同自主規制方式などに具体化され適用分野は広がっています。いずれも何らかの形で規制や調停が盛り込まれているのが特徴です。

### 6. 自然保護への問題提起

さてやっと最終段階にきました。ここでオストロムのいう「コモンズの悲劇」の解決のための5つの原則が屋久島の自然保護の改善策にどうすれば応用できるか対策を検討してみよう。

まず、①の定義のうち地理的な範囲や境界については、 国立公園の境界は指定域だから外界との境界は明確であり 問題となるようなことはない。それが共有する資源の範囲 である「コモンズ」に相当するであろう。公に認められた オープンアクセスの専有者の範囲は国民ということにな る。このように両者の定義ははっきりしている。

②は例えば共有地が牧場で、専有者が漁業に従事する人達という関係はあり得ない、上手くゆくはずはないという原則を述べている。屋久島の場合は山と山を指向する人の関係であるからボタンの掛け違いのようなちぐはぐな関係となることはない。ただし山を知らない人やマナーを守らない人が多いという、知識不足や人の品質の劣悪さが大きな問題となります。

③が問題となる部分ではないだろうか。例えばある原則を盛り込んだ規則を作ろうとすると、必ず島外の人と、地元の人の間には意見の相違がある。主に利害の対立となって表面化する。そのとき少なくとも両者間に調整の機能が働く原則があることと解釈される。もっともなことだが、当事者同士の話し合いはもちろんだが、誰が両者の間を調整するかが、また重要な問題である。当事者の範囲も簡単

ではない。ここは国立公園であるから、リーダーたる国すなわち環境省が毅然たる態度で臨むべきであろう。大家の林野庁に遠慮することはない。自然遺産登録に向けて動いたのは当時の環境庁であった。きちんと両者の立場をモニタリングして後始末をつける責任があるはずである。全て"地元の意向が先"では逃げにすぎません。

④のモニタリングは自然の保全と運営のいずれの面でも重要なことである。その対象となるものは何か。自然界と人間・組織である。いずれにしても、公的なレンジャーだけでは無理である。少なくとも人間が常識ある登山行動をとるかどうかについては、ガイド教育を徹底し登山客に注意を促すか、監視カメラを設置して、抑制効果を狙う。自然界に対しては専門家と地元で関心のある人にボランティアでお願いする。ここでは域内でさらに特別な地域の指定が必要であるという提案をしたい。ここでいう特別区域とは従来ある国立公園特別保護区と第一種特別保護区のほかに、人通りが多く踏み荒らされ易い場所に近接して区域を設定し、いわば人間を自然界から隔離する趣旨の区域の設置である。尾瀬の木道のように歩くところを制限してしまう。入域地域を数年ごとに輪番制にするものである。車両道の制限、ルートのランク付けなどである。

⑤の罰則の原則はなかなか難しい問題である。牧草地の場合、例えて言えば、軽い方から、牛の頭数制限、期限付きの立ち入り停止、全面立ち入り禁止、罰金、資格停止など徐々に厳しい形になろうか。これは専有者組合の昔からの慣習法に則っとるか、新規に決める規則で裁定されることである。

屋久島の場合にもまずどういう規則を作るかによって話は大きく変わってくる。③の原則にも関わることだが、私はもう立ち入りに関する条例なり政令なり、何らかの規則によって規制する時期に来ていると思っている。登山道を輪番に規制することや、入島料を徴収することもこの範疇に入る。入島税は沖縄で3例あるそうだが、税の公平原則から住民も100円払っているとのこと。はたして13700人の屋久島町民は島に出入りのたびに住民税に加えて入島税を払うだろうか。これは島だらけの日本では影響があまりに大きい。

そこで世界自然遺産の山を大義名分に、町が自然保護条例を制定し入山料を徴収すれば法制上も町民にも抵抗は少ないだろう。収入は保護基金とし一般会計と区別する。神奈川県秦野市水道局は一定量以上の地下水利用者に協力金を上積み課金している。あくまで税ではなく、水道料金だから抵抗が少ない。その際の課題は徴収方法をいかに公平に簡単明瞭化するかにある。

最終的に国の法律で追認する形にする。いちばん関係ありそうな現行の法律は、自然環境保全法や自然公園法およびエコツーリズム推進法で利用の規制の条項はあるが、入山料に係るような費用の徴収に触れた条項はもちろんない。だから判例で認められたいわゆる条例の「上乗せ」や「横出し」の論拠となる法律が存在しないのですんなりといかないが、法律を少し改正するのがハードルの低い攻めどころではないだろうか。

以上述べてきたことから、現在の屋久島の状況は、環境

問題を解決する政策でいう自主的な取り組みにゆだねる段階では対応できず、もっと踏み込んで直接規制政策や経済的刺激策を採り入れる時期にきていると判断される。いずれの策にしても屋久島町が動き出さないことには話が進まない。しかし、現状では利害が絡んで何らかの規制や課金を盛り込む動きはとくに行政と観光業界ではタブー視されているようにみえる。自然遺産指定のひとつに「ひときわすぐれた自然美」という条件がある。遺産指定はその保全こそが目的であり、観光開発を促進する趣旨はないはずである。

自然遺産の原点にたちかえり規制政策を具体化するためには中央の役人を動かさないとことが始らないのは自明である。いっぽう中央は地元がまとまることがお膳立ての前提と考えている節がある。こんなピンポン玉のやりとりをやっていては何も始まらない。

1978年世界で初めて世界自然遺産に登録される名誉に浴したガラパゴス諸島は、2007年観光圧力により「顕著な普遍的価値が失われた」と判断され自然遺産危機リストに入った。だがその後中央政府の強力な移住制限策が功を奏し、2010年7月にかろうじてリストから外れた。屋久島が不名誉な危機遺産リスト入りしないためには、抜本的な具体策を提示しないと危機はそこまで来ている。環境省はようやく動き出し実際に、2010年に動態や自然調査をした。指定後6年ごとにユネスコによって行われる保全状況の審査は2012年夏に予定されている。町の新執行部は調査結果を審査の基準を上回る施策として生かせるだろうか。

#### 7. おわりに

この文章は白神山地と知床の2地域の事情は疎いままに書き記しました。一方的な思い込みがあるかもしれません。白神山地では遺産地域は国有林ですから、林野庁が全域に一方的に入山禁止をかけたため、地元や労山が強引な措置に反対しています。もともとこの措置に法的な根拠はありませんので、強制力はないはずです。他方、環境省は自然遺産の登録後、自然環境保全法に則り、自然環境保全地域に指定しました。ここでは入山禁止はなく、立ち入りの規制に留まっています。ここにも行政の二重構造がみえます。また、ガイドの話は北海道では独自にその資格が形あるものになっていると聞きます。厳しく深い山が多いだけに当然のことと思われます。自然保護に配慮し安全な登山が楽しめるように、山を熟知する我々が政府と地元自治体に喫緊なことは何か、『提言』を幅広く訴えねばならないと考えています。

追記)環境省はユネスコに提出する管理計画改定案を1月 29日に公表し、意見公募を始めた。 締め切りは2月26日であった。

### 補遺. 中国大陸から屋久島に移流する酸性物質

大気圏と屋久島の渓川の地球化学的研究の結果、冬季に 中国から移送される気団によって屋久島西部が酸性物質 (石炭燃焼由来の硫酸塩が主体) に暴露されていることが 判明した。それは土壌の薄い屋久島の化学風化に影響し、 河川水の水質が酸性化することも示唆された。

#### 【参考文献】

Hardin, G. (1968) The Tragedy of the Commons. Science, 162. p. 1243-248.

http://ja.wikipedia.org/wiki/コモンズの悲劇(2010.5) http://ja.wikipedia.org/wiki/屋久島(2010.5)

大澤雅彦·田川日出夫·山極寿一編(2006)世界自然遺産屋久島. 朝倉書店, pp.199-216.

田川日出夫(1994)世界の自然遺産. pp.105-142., pp.163-182. NHKブックス.

辻 和毅(2009)アジアの地下水. 櫂歌書房, pp.53-80.

Ostrom, E. (1990) Governing the Commons The Evolution of Institutions for Collective Action. Cambridge University Press, pp.182-216.

菅 豊(2006)川は誰のものか 人と環境の民俗学.吉川弘 文館,pp.1-37.

国土交通省河川局編(2003)河川六法. 自然環境保全法, 自然公園法, 大成出版社, pp.1381-1401.

松村弓彦(1999)環境法. 第1章序説, 成文堂, pp.1-49. 植田和弘(2007)環境経済学. 岩波書店, pp.105-113.

World Heritage Centre (2005)Operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention. UNESCO,pp.199-210.

日本山岳会・自然保護委員会(2010)屋久島への提言 永淵 修 他(2003)屋久島西部渓流河川の水質形成に及ぼ す酸性降下物の影響. 水環境学会誌. 26巻, 3号,pp.159-166.

### 4. 海外トレッキング報告

### マカルー・ベースキャンプ(BC)への旅

No.6486 **太田 五雄** 

### 1. クーンブ・H、ネパール観光

一昨年の末脳梗塞で入院し、これで我人生の大好きな登山も終わりを感じていた。だが脳梗塞はその後のリハビリが大きく今後の生き方に左右されるという。だが、現状の生活の中ではリハビリは到底難しいと考え、あえて強制的に行う必要性があると判断し、ネパールのトレッキングで最も困難なマカルーBCへの旅を計画した。

ネパールへの出発2日前、JAC福岡支部の元支部長をされた松本徰夫先生から電話を受けた。私が脳梗塞を患ってネパールへ行く事を心配されてのことであった。

屋久島を3月18日に出発したが、当日の夜松本先生が倒れられたことを後日知らされた。当時はそのことについて知る由もなく、20日成田出発の予定は東日本大震災の影響で21日羽田発に変更されその夜香港を経由してカトマンズに入った。

ネパールでの始めの2週間は同行者5名を伴ってクーンブヒマラヤのナムチェ・バザール、シャンボチェを訪れ、ポカラ、カトマンズの観光を行った。

#### 2. 困苦のトレッキング

4月3日、同行者4名の帰国を見送り、ネパールでの連絡先に立ち寄ったところ松本先生が3月30日に亡くなられたことをメールで知った。深い悲しみを胸にマカルーへの旅を敢行しなければならなかった。ネパールでのトレッキングには様々なルートが観光的に開発されてきた。だが、マカルーBCへのトレッキングは日数を要する事とシプトン・パス、アルン川右岸の危険個所の通過、登下降の高低差が大きいことで一般的とはいえずトレッカーはいたって少ない。それだけに新鮮であり、魅力ある地域である。

同7日、マカルーBCへの旅の起点であるネパールの東ツンリンタールに飛んだ。しかし隊荷はカトマンズに置かれたままで次のフライトで届けられるという。後からポーターが荷物を受け取って追いかけてくることになった。結局荷物はトレッキング途上9日に受け取った。

標高 400m のツンリンタールは熱帯に属し猛烈な暑さの中をボーテ・バシュ、マネ・バンジャンン (1100m) へと登る。 尾根上の点在する集落を観察しながらの旅は暑いけれど何時ものように楽しい。

この尾根道は現在ヌン迄車道が通じ、連日雨の泥濘の道をジープが往来している。本来歩いて行く予定でいたが少々予定より遅れていたため9日チプレ・ガオンで昼食を取った後ジープをチャーターしヌンへ向かった。ジープにはガイド、ポーター、コックなどスタッフ11名、我々2名、運転手、サポーター等総勢15名、加えて隊荷が加わる。超満載のジープはブルで押しただけの無舗装の道路を容赦なく進んだ。

デオラリを過ぎて猛烈な雷雨に遭遇し赤土の車道に難儀する。3度のスタックに全員ずぶ濡れになり、泥濘からの脱出に苦労した。夕刻7時、雷雨の中を疲労困憊してヌンに辿り着いた。

翌10日、ヌンから西側急斜面を800m下りアルン川に出る。両岸ゴルジュの峡谷にかかる危なげな吊橋を対岸へ渡り、再び急峻な斜面を800m登ってセドアに到る。標高差の大きい登下降に辟易する。

翌日、シプトンパスから南に延びる尾根の東斜面をトラバースして標高差500m登ってタシガオンに至る。背後のシプトン・パスは雪を抱き、暗雲が漂ってこれからの登高に不安がよぎった。

13 日は相変わらず天候が悪く、降雨の中に急登が続き 雨は雪霰に変わる。尾根上のウンシサに至り、吹雪の中の 急峻な尾根を登って標高 3560m のカウマに至った。この日 標高差 1500m の登りに体力の消耗は激しかった。

翌日、ポーターの休養も兼ねて1日滞在する。天候は悪く寒々とした2件のロッジが霧に包まれていた。

### 3. シプトン・パスを越えて

翌14日、シプトン・パスへの登りは雪雲漂う痩せた岩稜が続き、急斜面のトラバースや雪面の登りは雪崩の危険とスリップの危険が伴う。併せて4000mを越える高度に高所の影響を受けて苦しい。

雪に埋もれた小さな池を過ぎ、急峻な雪の斜面を登り、



CHAMLANG (7290m) MAKALU-S • ERIDGE (5300m)

ケケ・ラ(4127m)に達する。峠を越えると急な雪面を下り、 雪に覆われたトロ・ポカリに立ち、寒気きびしい石造りの カルカで昼食をとる。

食後雪交じりの急なガレを登って吹雪のツツ・ラ(4075m) に立つ。雪と霧が吹きすさぶ雪面をさらに1時間ほど下り、 1件のカルカがあるドバドに辿りついた。

翌日、氷化した急斜面に難儀し、ムンブクを過ぎ、更に下ってバルン・コーラに降り立つ。咲き始めた石楠花とモミの森は蘚苔類に覆われ、屋久島の森を彷彿とさせる。

巨岩の岩屋を過ぎ、バルン・コーラ右岸の 2km に及ぶ長大な岩の崩落地を辿る。新しい落石の痕跡が常に崩壊している様子を伺わせた。危険地帯の脱出に安堵し、バルン・コーラ左岸のヤングレ・カルカの草原にテントを張る。

### 4. マカルー BC

カルカからはバルン・コーラを離れ、左岸上部のモミの 林を辿る。ピークⅦ、ピークⅤ、ピークⅢ等の 6000m 級高 峰が左右に展開する。

バルン・コーラに出てからは急な登りはないが、4000mを越える高度に少々息苦しくなる。右岸頭上には標高 6739m のピークVIが鋭鋒として峻立している。更に前方にはチャムラン(7290m)ピラミッド・ピーク(6830m)、ピークIV(6720m)が競うように連なっている。

セルションを過ぎ、右へ回り込むと待望のマカルー (8481m) が姿を現す。山頂から雪煙がたなびき、圧倒的巨峰は 3000m を越える高度差をもってバルン・コーラの源流に落ちている。

ツンリンタールを発って9日目、苦しい登高に終始し、 降雪の中標高4800mのマカルーBCに辿り着いた。

今春のヒマラヤは天候に恵まれず、連日低地では雨、高所では雪に見舞われた。BCでは2日間滞在し、バルン氷河や写真撮影の為背後の5300mの丘陵に登った。

飛び交う雲の流れの中に時折見せるエベレスト、ローツエ、マカルー、周辺に聳える高峰にヒマラヤの山々を堪能した。

4月19日、苦労して登ったBCを後にする。帰路は登時と同じくシプトンパスを越えてセドアに戻り、これよりアルン川の右岸に沿って下る。このルートはトレッカーにも



MAKALU (8463m) BALUN • GL (5000m)

出会うこともなく、静かな旅を楽しんだ。途中大きな支流にかかる危険な吊橋を渡ったり、断崖をへつって尾根を越えたり、ヤマヒルに悩まさるなど苦難の旅ではあったが、26日エルワベシからマネバンジャンを越えてツンリンタールまでローカルジープで無事ツンリンタールに帰った。

#### 5. パンサン・パスへ

古希を前にし、脳梗塞のリハビリを兼ねたBCへの長旅はこれまでになく体力の消耗が激しかった。カトマンズで3日間休養した後再びガネッシュ・ヒマールの東にあるパンサン・パスに行った。

カトマンズからランド・クルーザーでランタン・ヒマールの起点であるシャブル・ベンシを経由して急峻な悪路を辿り、丸1日を擁してクルプダンダ・パス (3739m) の近くにテントを張った。深いボーテ・コシの谷を隔ててランタン・リルン (7225m) を盟主とするランタン・ヒマールの景観を楽しむ。

翌2日は一旦マイルン・コーラに下り、最奥の村ソムダンで休憩した後、パルドール (5896m) から南に伸びる尾根の斜面を登り尾根上の峠に出る。更に尾根の南急斜面を横断し、ソムダンの村から4時間でパンサン・パス (3850m)に辿り着いた。

この日、夕刻より雪氷混じりの猛烈な吹雪に遭遇し、テント毎飛ばされるのではないかと危惧されたが、どうにか 絶えることができた。

翌日は昨日の吹雪が嘘のように爽やかな快晴で明けた。 背後の高台に登り、ガネッシュ・ヒマールの II 峰(7150m)、 IV 峰(7052m)、遠くにヒマルチュリ(7893m)等の景観を 楽しむ。

このコースではラリーグラス(石楠花)、サクラソウなど、ヒマラヤの名花が群落を成して展望も素晴らしく、帰路はドンチェに一泊した後僅か4日間の旅でカトマンズに帰った。2ケ月のリハビリの旅は、効果も絶大で、体調に何等問題が無かったのは幸いであった。

5月初めに帰国し、その足で松本徰夫先生宅を訪れ、釈 迦誕生、仏教発祥の地ネパールのヤクボーンの数珠と線香 を仏前にお供えし冥福を祈った。

2011. 12・10 記

### ミャンマー・ヒマラヤ視察とミャンマー周遊の旅

No.9826 **○ 渡部 秀樹** 

辻和毅さんから「ミャンマー最北部のプタオに行けるよ うになったらしい」と話があった。プタオと言えばチベッ ト国境に聳えるミャンマー最高峰のカカポラジへの入口で はないか。そして、東チベット、カンリガルポ山群から 続く山脈が国境を越えて平原になるあたりである。ミャ ンマーにはビルマの時代1985年に一度訪問したことがあ る。まだネ・ウィン将軍が大統領であった時代で外国人旅 行が厳しく制限されていた。しかし、人々の質素ながら明 るい暮らしぶりや、パガン遺跡に沈む夕日の美しさに魅了 され、いつか再訪してみたいと思っていた。早速、ミャン マー・トレッキングの第一人者である金澤聖太氏に連絡を 取りスケジュールを決めた。金澤氏は辺境作家の高野秀行 氏のミャンマー探検行などもアレンジしている。かつては 現地でトレッキング会社を営んでいたが、2007年に映像 ジャーナリストの長井健司さんが治安部隊に撃たれ殉職し た反政府デモ鎮圧事件の影響などもあり、現地法人に任せ て日本に引き上げていた。金澤さんの話を聞くと最高峰の カカポラジはキャラバンだけでも1ヶ月近くかかり、その 姿を見ることすら容易でないことがわかり、手軽に見られ る 5000m 級の山としてマドエラジ山麓を選んだ。

2011年4月2日、福岡からバンコク経由でヤンゴンへ 飛ぶ。かつてはラングーンと呼ばれ 2006 年にネピドーに 遷都されるまでは首都であったが、現在もミャンマー最大 の都市である。ちなみに、ビルマからミャンマー等の名称 変更についてであるが、これは 1991 年に軍事政権により、 外国で使われた名称を国内一般で使われていた名称に改め られたもので、ヤンゴン(旧ラングーン)、バガン(旧パ ガン)、ミッチーナー(旧ミートキーナ)、バゴー(旧ペ グー)、エーヤワディー川(旧イラワジ川)、タンルウィン 川(旧サルウィン川)など約1000ヶ所が改定されたとい う。軍事政権の政治的問題や馴染みある地名が変わったこ とへの抵抗感からどちらを使うべきか各方面で論議された が、ジャパンをニホンに改めたと思えば理解もできる。最 近のミャンマーの政情は、2010年に民主化運動指導者の アウン・サン・スー・チー氏の自宅軟禁が解除され、2011 年1月に49年ぶりに複合政党による議会が行われた。ま た出発直前の3月末に軍事政権のテイン・セイン大統領に よる新政府が発足し、軍政主導ではあるが、開かれつつあ る感があった。

夜、ヤンゴンでガイドのトントン氏と合流。彼はカレン族とビルマ族とのハーフだという。ミャンマーの民族はビルマ族が約7割を占めるが、大きく8つの部族(ビルマ、シャン、ラカイン、モン、カチン、カヤー、カイン、チン)、さらにその中に全体で135にも及ぶ民族が存在し、それぞれの部族で州がつくられており、独自の文化を継承している。トントンはミャンマー人としては珍しく登山経験が豊富で、カカポラジのトレッキングなども案内したことがあるという。



カカポラジに初登頂した2名(尾崎隆とジャンセン)

翌4月3日早朝、ヤンゴンから空路、マンダレー、ミッ チーナーを経由して、憧れの最北のプタオ飛行場に着いた。 この便は週2便の周遊運航で直前まで運航日が二転三転し た。その関係で2日後の便で戻らなければならなくなり、 到着後すぐに奥地に入ることになった。我々を出迎えた車 はポンコツのトラックだった。空港からトラックの荷台に 乗り、悪路を直立したまま必死にしがみつく。最初に見え た景色は墜落した飛行機の残骸であった。トラックでマリ カ川の支流を何度も渡渉し、ジャングルの悪路を転げそう になりながら進む。途中、カンティ・シャン族、ラワン族、 リス族の村を通る。まるで弥生時代の吉野ヶ里に迷い混ん だかのような村の光景である。約3時間進むとこれ以上は トラックでも進めなくなり、下車し小1時間歩いて民家数 戸の小さなマリレン村に着いた。高床式の教会があり、そ の隣の簡素な高床式の家に住む伝教師が家を空けてくれ泊 めてくれることになった。



【写真左】 移動はトラックの 荷台

【写真右】 一泊した民家

4月4日、マリレン村からジャングルを歩き、マリカ川支流のナミジェム川 (川幅約50~60m) を渡渉する。丸石に水苔が付着しており滑りやすい。遊牧民は登山靴を脱いで靴下で渡るのがここのやり方というので試すと、確かに滑りにくい。2時間歩いてマドエラジ山が望めるというノアセチュ (またはクサキャミ) と呼ばれる放牧地に着いた。旧ソ連の地形図には4626mのマドエという山が見える。ここ (北緯27度37分) より北には閉ざされた小さい集落がひとつあるのみで、歩行は困難となるそうだ。ここが金

澤さんのいう、最も短期間でチベット・インド国境稜線の山が展望できる場所だが、生憎曇空で山は望めなかった。しかしミャンマー北部のトレッキングの雰囲気を味わうことができた。こういうキャラバンを1ヶ月近く続けるには、食料運搬や、渡渉、ジャングルでのルーティング、セルフレスキュー等の課題があるだろう。

夕方、マリレン村に戻り、トラックでナムシェコ村に移動。ここは人口約1400人、220戸の割と大きな村である。村長の家に泊めてもらうことになった。村には赤ん坊を背負い鼻水を垂らした児童や、牛車でのんびり家路を辿る農夫など、昔の日本の農村の光景がある。電気もなく、竹の家は壊れてもすぐ再建できる程度の質素な暮らしである。3.11東日本大震災の地獄絵図を見た後ということもあり、失うものが少ないシンプルな暮らしというものを考えさせられた。

その後、マンダレーに2泊、バガンに2泊、ヤンゴンに1泊と周遊し、主に寺院を中心に見学した。マンダレーはヤンゴンからイラワジ川にそって北へ約700キロ、ミャンマーのほぼ中心にある第2の都市。地理上、民族上からも、ミャンマー文化の中心だ。ミャンマー最後の王朝があり、広い旧王宮と碁盤の目のようにはりめぐらされた街路からなるこの町は、ミャンマーの京都とも言えかもしれない。



シュエダゴン・パゴダ

郊外に点在するサガイン、アマラプラ、ミングォンなどの 旧王宮のあった町々はどれも一言では表せないない魅力の ある場所である。

バガンはカンボジアのアンコール・ワット、インドネシアのボロブドールとともに世界3大仏教遺跡に数えられる壮大な仏教遺跡群がある。約2000以上ある仏教遺跡群は世界最大であろう。数々の仏像、壁画は戦禍を逃れ、非常に良い状態で見る事ができる。またバガンの夕焼けは時を忘れる美しさがあった。

ヤンゴンはミャンマーのかつての首都であり、英国コロニアル風の町並みは、植民地時代の影響を色濃く残す。ヤンゴン最大の魅力とは、なんといってもシュエダゴンパゴダだ。ミャンマーのシンボルであるその壮大で美しい姿は、訪れた者の脳裏に深く焼き付く。ミャンマーが黄金の国ジパングであったのではないかとすら思ったのであった。

帰国後、金澤さんに旅の報告をした際、カカポラジの写真を撮られていたことを知った。実は今までカカポラジの鮮明な写真は報告されていないのである。早速送ってもらい横断山脈研究会に報告をした。中村保さんもカカポラジの鮮明な写真は初めて見たとのことで、JAPANESE ALPINE NEWS で紹介されることとなった。今回の視察は短期間ではあったが実りのある旅であった。



カカポラジ (標高 5881m) 撮影:金澤聖太

## 5. 会員の活動

平成 23 年度総会記念講演

### 90歳・私の歩んできた道~戦地ニューギニアから北アルプスの山々へ~

No.10203 上岡 謙一



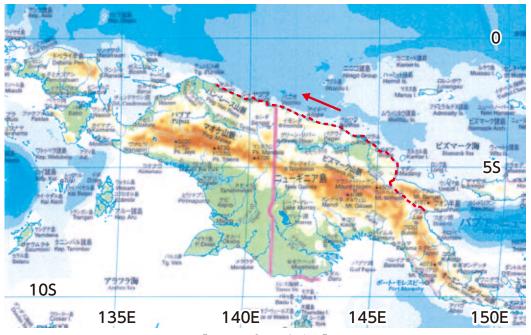
この「講演要旨」は、さる 2011 (平成 23) 年 5 月 15 日、日本山岳会福岡支部の通常総会で行なわれた上岡謙一会員の記念講演を聞き手の高木荘輔会員がまとめたものである (DVD 同時録画・佐々木耕二会員、写真撮影・酒匂輝昌会員)。

### はじめに

私(上岡謙一)は、1921(大正10)年1月1日生まれで、 満90歳になった(現在は91歳)。これまでの人生を振り かえると、本業の機械製作工場の経営はさておいて、青年時代は、まさに九死に一生を得た太平洋戦争ニューギニア戦線への従軍、戦争が終わって帰国後の登山活動、とくに北アルプス前穂高岳東壁・厳冬期初登攀や「ナイロン・ザイル事件」とのかかわりなど。思い出が沢山あるが、まずは、ニューギニアでの戦争の話から始めよう。

#### ニューギニア戦線

1940 (昭和15) 年8月、私は、97 式戦闘機の整備・組み立ての技術者として陸軍に入隊、第12 航空教育隊・整備中隊に配属された。当時、海軍の零式戦闘機と並んで活



【ニューギニア島略図】

躍した陸軍の97式戦闘機は14気筒(7気筒の並列)のエンジンを持ち優秀な戦闘機とされていた。今も世界でただ1機、現存していて、現在は福岡の大刀洗平和記念館で保存・展示されている。

入隊後、広島から旧満州のハルビンへ移動。そこで6か 月間訓練を受けたあと、1941(昭和 16)年 11 月ハルビン を出発。同年12月8日(太平洋戦争開戦日)、日本軍のハ ワイ真珠湾攻撃とともに、われわれはマレー半島タイ領に 上陸、南下してシンガポールへ進攻した。さらに1942(昭 和17)年4月、落下傘部隊降下後の防空援護のためスマ トラのパレンバンへ移動。同年8月からシンガポール、ビ ルマ、ラバウルをを転戦、開戦1年後の12月には、ニュー ギニアの東部、ラエに入った。途中、マンダレーの近く のメミヨでは、11月というのに美しい桜の花を眺めたり、 カメに作られた現地産の焼酎で酒盛りをやったり、まだ余 裕があったが、ニューギニアに入ると頻繁に行われる米軍 の爆撃で飛行場の滑走路は穴だらけになり、修復作業に追 われるようになった。ラエのあるフオン湾周辺には、米軍 艦隊が集結し砲撃も激しくなってきた。圧倒的軍事力を持 つ米軍のフオン半島への上陸と攻撃で、激戦と転進を繰り 返すうち、日本軍の死者が相次ぎ、ついに食糧も弾薬も底 をついてとうとう「玉砕」の命令が下った。

太平洋戦争では、日本軍将兵300万人が戦死したとされているが、このうちニューギニアでは、20万人の将兵の

うち18万人もが死んでいて、のちに、のちに、「最も過酷な戦争」、「見捨てらればれたをはどで、まさにがない。」、では、また。では、また。では、また。では、ない、いたの死体が、いたる



ところに転がっていた。常に、これからどういう目に会うのか、明日はどうなるのか分からぬ運命だった。飛行機もほとんど無くなってしまったので、高度 4000m 余の山を越えて転進したが、体力が落ちていて、しばしば動けなくなった。昼間は敵に見つかるので、夜間の行動が多く、途中、飢えやマラリアで、どんどん兵隊が死んで行く。やがて海岸線に沿って北西へ進み、マダンに着いたころには、全滅状態になっていた。

「ニューギニア激戦の記録」など、この戦の模様を描いた本がいくつも出ているが、これらの本を読むと、ヘビやカエルはもちろん、人肉まで喰った話や、手榴弾で5人が一緒に自殺した話、上官をピストルで射殺した話など、いろいろ悲惨な話が沢山出てくる。私は目撃はしていないがそういう話は聞いた。いずれにしても、極限状態の中、「苦しくて死んだ方がいい」という心境の人が、かなり多かったのではないかと思う。

さらに北西へ進んだサルミ(オランダ領)で「終戦」を迎え、10か月後の1946(昭和21)年6月、和歌山県の田辺へ引き揚げ帰国した。25歳だった。その後、戦友の慰霊と遺骨収集のため、5~6回、旧戦地へ赴き、学校を建てたり、記念碑を作ったりした。時がたち、平和な時代になった今やっと登山やトレッキングを兼ねて、皆さんをご案内してもいいと考えられるようになった。

### (以下、高木記す)

講演時間の制約もあり、以上で上岡さんの講演は終わったが、当日、予定していてお話することが出来なかった登山についての講演内容(レジュメ)を以下に付記しておく。

### 北アルプス登山

1947 (昭和 22) 年、ニューギニア戦線から帰国した翌年、 福岡山の会に入会(故・加藤秀木さんの紹介)。国体(国 民体育大会)福岡県代表として全国大会に出場。

そこで、堀田弥一氏(2011年2月102歳で逝去・日本

山岳会名誉会員・立教大 OB・インドヒマラヤのナンダコート初登頂) と知り合う。

1948 (昭和23) 年、岩稜会 (本部=鈴鹿市) に入会。 石岡繁雄会長 (創設者)、石原一郎さん (兄)、石原國利さん (弟) らとも登山活動。

1948 ~ 1949 (昭和 23 ~ 24) 年、北アルプス鹿島槍・東尾根(厳冬期)末端からの完登。深田泰三氏(元日本山岳会福岡支部長、当時 17 歳の高校生)も参加。

1950 (昭和25) 年、前穂高岳東壁、厳冬期初登頂を記録。

### ナイロン・ザイル事件

1955 (昭和30) 年1月、前穂高岳東壁登攀中の岩稜会3 人パーティのうち、ナイロン・ザイルが岩角で切断し。若山五朗さんが滑落死。当時、軽くて強いとされていたナイロン・ザイルの欠陥が問われた事件。メーカーの責任追及と自分たちの名誉回復のため、世論や裁判に訴えて、石岡会長(若山さんの実兄)や同行の石原國利さん(日本山岳会東海支部・福岡県在住)らが苦労された。上岡さんらは、遭難の翌日、遺体収容のため、奥又白池のテントから出動、遺体をかついで下ろした。 1956 (昭和 31) 年、作家・井上靖が、この事件をテーマに小説「氷壁」を朝日新聞に連載開始。その後、2回にわたって映画化される。作家・井上靖、画家・生沢朗(小説の挿し絵)さんらとのお付き合いが始まる。事件の真相、登山の技術・知識などの取材に対する協力、毎年定期的に行われてきた井上先生を中心とした集まりへの出席、海外山域(アフガン・バーミヤン・ネパール・ヒマラヤなど)への旅行に同行など、多面的にお付き合いされた。

#### 最後に

過去に、早朝の宝満山頂往復のトレーニングで膝を痛めたり(75歳の時、両膝にチタンを埋め込む手術をして現在も登山続行中)、工場での作業中、手の指を切ったり、転倒事故による脳の切開手術をしたりするなどケガの事故はあるが、現在の健康状況は良好である。

悩みは、埋め込んで15年が過ぎた両膝のチタンを入れ替える手術を受けるかどうかで、入れ替えて、登攀能力が上がればという期待感も一方にはある。

# 23年秋の発心山 (耳納山地) と冬の皿倉山 (北九州) の山行の記録

No.8125 **副島 勝人** 



### ◇秋の山行◇

発心山(697.5m) 2011.10.1 (土) 晴れ時々曇り

【参加者】 飯田、石松、江崎、大中、加藤、佐々木、酒匂 副島、高木、中馬(董)、中村(寛)、中村(正) 水野、光安、森山

筑後地区在住の会員、山井さん、大中さん、江崎さんのお世話で、耳納連山にある発心山に登る。山頂には、草野・山本地域を治めていた草野氏の山城があった歴史的な山でもある。曇り空で風はやや冷たいが絶好の登山日より。西鉄久留米駅からバスで草野上町まで行く。バス停近くの発心公園で、草野氏と発心城の話があり、ストレッチの後出発。権現神社の鳥居を過ぎ樹林帯の中の登山道をゆっくり登っていくと、尾根ルートと横岩ルートの分岐点に着く。ルートを尾根ルートに取り登るとすぐ蔵跡に出た。植林帯の中の道は急でハシゴがかかっているところもある。やがて草つきのやや広い尾根となり、振り返ると筑後川を真ん

中に筑後平野から背振山、宝満山、古処・馬見、そして英 彦山と雄大に広がる素晴らしい眺めに疲れも忘れる。これ から山頂はすぐだ。山頂で昼食後記念写真を撮り往路を下 山。バス停近くの果樹園で「西村柿」を求め、バス停前の 酒屋で一杯やりながらバスを待つ。久留米ではいつものよ うに賑やかに反省会を行い終了とする。

秋の爽やかな1日、楽しい登山を計画していただいた筑 後地区の会員の皆様、ありがとうございました。参加者一 同、厚く御礼申し上げます。

【時間】発心公園 10:26、3合目 10:57-11:06、5合目 11:26 7合目 11:52、発心山 12:21-13:02、蔵跡 13:46、 草野上町バス停 14:50

### ◇忘年山行◇

皿倉山(622.2m) 2011.12.10(土) 天候 曇り ○忘年会:河内温泉「あじさいの湯」

【参加者】飯田、石松、斉田、酒匂、佐々木、副島、高木、竹原、中馬、中村(寛)、中村(ひ)、水野、森山、淀川、渡邊、角野(スイス山の会)、嶌本(スイス山の会)、上岡、辻、深田

登山 17名・忘年会 19名

昨年からはじめた忘年登山、今年は北九州市八幡東区の背後にそびえる皿倉山。麓から見ると頂上は平たく電波塔が立ち並び皿を伏せたような格好に見えるが山名の由来は全く違う。ガイド本によると、神功皇后西征の折、皇后が山頂から日暮れまで国々を眺望し夕暮れが迫り「更に暮れたり」といったのが更暮山、更暗山となり今の皿倉山になったとの伝説があるとのこと。我々も更に暮れないように、登山組17名渡邊美代子さんのガイドで八幡駅前を出発。

30 分ほどで煌彩の森コース登山口に着く。登山準備とストレッチの後出発。福岡は三日前ほどからの雪模様、登山道は薄暗く寒さが増すようである。時々車道を歩き、県立ふれあいの家に出る。杉林の中の急な道をジグザグに上るとやがて皿倉の泉に着く。この付近から登山道に雪を見るようになる。自然林の中の静かで緩やかな道をゆっくりと登っていくと皿倉平に出た。ここを左折し九州自然歩道に入り、ひと上りするとビジターセンターに出る。ビジターセンターにリュックを置き山頂へ。山頂広場はうす氷が張り雪の中、寒さがやや厳しく感じる、しかし頂上から眼下に見る景色は素晴らしく雄大である。ビジターセンターに戻ると、北九州支部の方々と会う。彼らもあじさいの湯で

忘年会とのこと。昼食後我々もあじさいの湯めがけて元気に出発、90分ほど後、冷えた身体をあじさいの湯で温めることが出来た。

お風呂の後は、湯冷めしないようにそれぞれ早くも忘年 会の前哨戦、やがて気がつくと忘年会は盛大となり帰る時間となった。今日の登山と忘年会をお世話いただいた渡邊 美代子さんありがとうございました。参加者一同厚く御礼 申し上げます。

【時間】八幡駅 9:45、煌彩の森コース登山口 10:22-10:34、ふれあいの家 10:55-10:59、皿倉の泉 11:36、皿倉平 12:02、ビジターセンター 12:12、皿倉山頂 12:25、あじさいの湯 14:30 頃着

### 書籍紹介『ヒマラヤの氷峰ーヒマラヤ 50 年の追想ー』 太田五雄著



太田五雄山岳記録写真集, 171p, 南方新社, 2011年, 5000円

太田五雄さんと言えば屋久島山岳の研究者として知られている。屋久島の山を語る上で「屋久島の太田」を知らなければもぐりといってもいいかもしれない。その太田さんがヒマラヤを広範囲に踏査していることは意外に限られた人の間でしか知られてないのではなかろうか。この写真集を手にしたとき、3つの意味で驚愕した。

ひとつは、これだけ広範囲に、そして細部においての踏査は他に類がなく、 執念としかいいようがない。私ごとで恐縮だが、登山・トレッキング、山旅 を生業としている私でも不可能だと思う。その足跡は、ロールワリン山群か らテシ・ラブチャを越えてクーンブ山群、ランタン氷河最奥のティルマンズ コル、ブドゥズンゲ・バラ越え、ダウラギリ西面からフレンチ・パス越えなど、 まずトレッキングとしては行くことのないマニアックなコースも含まれてい る。また、通常ヒマラヤ山脈とは西のインダス屈曲部のナンガパルバットか ら東のヤルツァンポ大屈曲部のナムチャバルワまでを指す。ここではヒマラ

ヤの範囲を越えて、カラコルム、チベットの長江全流域、ニェンチェンタングラ山群、ヒマラヤの東のカンリガルポ山群 まで範囲を広げている。太田さんの妥協を許さない好奇心と情熱を知ることができる。

ふたつ目は、それはただの踏査ではなくて、美しい山の姿を写真に収めているという山岳写真家としての執念が見える。 太田さんはプロカメラマンではないが、これらの作品を見れば、登山家としての厳しい眼力で山を眺めていることが解る。 視点は氷河を越え、雪壁や雪稜を追っている。そして、そのピークが一番美しく収まる地点に彼は立っているのだ。構図 には山をどっしりと置き、山に対するひたむきな愛情を感じる。

3つ目は、これが退職後も含めてではあるが普通のサラリーマンによって成し遂げられたことである。太田さんがヒマラヤ行を初めて計画したのは 1968 年のことだ。この時はネパール情勢により叶わなかったもののボルネオに転進してツクシピークを初登している。そして 1971 年福岡 GCC を創設してロールワリン、クーンブへ。1973 年にはランタン山群の登山へと続く。1995 年に早期退職してからは怒涛のヒマラヤ行きとなる。まさに山に人生を賭けた生きざまである。これからの時代の登山家では太田さんのような才器は出て来ないのではないかと思う。この 50 年はヒマラヤにとっても太田さんにとっても特別な時代であったのかもしれない。

### 6. 事務局報告

### 計 報

会員番号 4607 の松本徰夫氏(福岡市城南区別府2丁目13-25) は、2011年3月30日に逝去されました。氏の福岡支部に対する多大の貢献に感謝申し上げますとともに、謹んで哀悼の意を表します。

#### 新入会員紹介

No.14882 飯田建夫 No.14913 江崎眞晴 2011年 4月入会(紹介者:中村寛三·副島勝人) No.14945 田中正次郎 2011年 6月入会(紹介者:五十嵐賢·副島勝人)

### 《編集後記》

いよいよ4月1日より日本山岳会は正式に公益社団法人となります。予算事務の煩雑さ、地方支部への交付金の減額など良いことは何もない気がします。しかし公益事業を上手く活動に取り込めば、本部から予算を引き出し独自に支部を活性化できる訳で、そう思えば活動への意欲も湧き少しは気が楽になるでしょう。2011年度の福岡支部は、上記の準備も含め多事多難でありました。それだけ支部報の内容は多岐に亘りました。卒寿を迎えられた最長老の上岡会員の"たぐい稀"な人生の一部を垣間見て、読者はどう感じられたでしょう。他者の随従を許さない強靱な体力と精神力は穏やかな口調の中に、おのずと畏服する迫力をもって感じられました。いっぽう、2012年は世界遺産の屋久島にとってユネスコの審査の年です。支部は役員改選の年です。昇龍のごとくうねりくる変革の年なのかもしれません。(A.B.)

発行者:副島勝人

編集者: 辻和毅・倉智清司 発行日: 2012年(平成24年)

3月15日

発行所:社団法人

日本山岳会福岡支部

〒811-1302

福岡市南区井尻5-6-14-201

渡部秀樹 方

TEL/FAX 092-592-8170